

論文

宗教の異なる移民先における家庭での宗教継承の可能性  
ーフィリピン人、ブロックロザリーー

藤本 陽子\*1

キーワード：フィリピン、ブロックロザリー、国際結婚家庭、宗教、継承

はじめに

筆者の拙文「家庭内での使用言語と子どもの日本語会話能力ーフィリピンにつながる子どもたちー」で、国際結婚家庭内（フィリピン人母と日本人父）では日本語が最も多く使用され、場合によっては日本語以外の言語は使用されていないことが確認された。日本語が優勢言語である日本において、母親の母国語（主にタガログ語）は劣勢言語で使用されないことから、母親の言語を継承しにくい、つまり母親の持つ文化の一つである言語の継承が行われにくいということが確認された<sup>1)</sup>。言語の継承が目されるのは、第二世代のアイデンティティ形成に関係するからである。本稿ではアイデンティティを形成する文化の、別の面である宗教の継承に焦点を当て、その継承の実態と可能性を探りたい。

フィリピンはキリスト教国である。Philippines Demographics Profile 2014によれば<sup>2)</sup>、ローマ・カトリックが総人口の82.9%を占め、その他キリスト教関連宗教と合わせると92.5%になっている。

そのフィリピンから2015年12月現在、日本に中国、韓国・朝鮮に次ぐ3番目に多い人口となる229,595人<sup>3)</sup>が日本の各地に居住し、ある者は教会を中心にコミュニティを形成している。フィリピン人の特徴は、来日している男女比では女性が圧倒的に多いことで日本人男性と結婚しているケースが多いことである<sup>4)</sup>。<sup>註1)</sup>。そのため、夫・夫系家族と宗教が異なることにより、家庭内での宗教的マイノリティとなっている。実際に本稿でとりあげるブロックロザリーという活動の起点

になっている教会に集まっているのはフィリピン人女性が主である。一緒に来る子どもたちはフィリピン人母の意向と日本人父の賛同で洗礼を受けてはいるが、クリスチャンとしての自覚はあまり見られず、またフィリピン人妻が日本人夫を伴う数はわずかである。

このような家庭に生まれ育った日比の子どもたちは「文化的ホームレス」になっており、日比の子どもが2つの文化のもとに生まれていることを認識すべきであること、また家族は異民族を重視しない傾向にある日本との2文化の環境が子どもたちを取り巻いていることを認識すべきことが示唆されている<sup>5)</sup>。そのような状況で、第二世代のアイデンティティの一面を形成する第一世代から第二世代以降への言語、宗教を含む文化の継承は容易には行われていないのが現状である。

同様のことは日本国内に留まらない。例えばアメリカ合衆国でも、カトリック教国の南米から家族で移住してきたヒスパニックの宗教的なアイデンティティが、移住先アメリカの文化に同化され、アメリカで出生あるいは英語を第一言語として話す世代はプロテスタントに転向するか教会を離れることが指摘されており<sup>6)</sup>、国際結婚家庭でなくても移住先の国で子どもが親の文化として言語とともに宗教を継承しにくい現状が明らかになっている。

本稿では、フィリピン人第一世代の教会外でのブロックロザリーとよばれる活動に筆者が4年弱同行し観察したことから、親の宗教の第二世代以降への継承の障害と、その継承の可能性について探る。

\*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

## 1. ブロックロザリー概観

ブロックロザリーとは、Mama Mary と彼らが呼ぶマリア像（地域によって別の像）を持ったグループが、居住区域である1ブロックの中の各家庭を一定の期間をおいて周り、マリア像が訪れた先でロザリオの祈りをする活動である。日本にはロザリオの祈りはあるが、このような活動は日本人のカトリック信者の間に見られない。フィリピンでは、信者の教会外での自発的な活動として行われている。マリア像が訪れた家では、その滞在期間マリア像に対してロザリオの祈りとその他祈りが唱えられる<sup>註2)</sup>。準備からマリア像滞在中すべきことまでは WikiPilipinas の Block Rosary の項にあるが、そこには準備として日程調整、マリア像受け入れのための祭壇の装飾、心の準備の勧め、祈りの本の提供、祈りの意図の用意（何のために祈るのか）から受け入れの日の入場の順番、マリア像滞在中毎夕家族で一緒に祈ることなどが記述されている<sup>7)</sup>。教会が直接コントロールしている活動ではないが、ブロックロザリーセンターを通じて教会の家庭へのニュース配布が容易に行われる<sup>8)</sup>ように、各家庭をグループが訪れることにより家庭と教会とを結ぶ役割を担っている。また、日本在住のブロックロザリーを行っているフィリピン人に行ったインタビュー<sup>註3)</sup>によると、フィリピンでは家族全員参加の活動であること、祈りの繰り返しによって子どもたちが祈りを覚えているということで、教会敷地外である地域、家庭内での宗教活動により宗教の基本、祈りの継承が行われていることが分かる。

フィリピン国外では、例えばイスラエルでも行われている。イスラエルでは出稼ぎ家庭内労働者としてフィリピン人女性が多く働いており、そのフィリピン人女性たちが、イスラエルという宗教の異なる国で休みの取れる金曜日（ユダヤ教では金曜日の夜から休みになるため）の夜、ひっそりと行っているという。出稼ぎせざるを得ない本国の厳しい家庭の状況と異国での苦しい生活が、マリアへの祈りに心を向かわせている

こと、マリアへの祈りで願いがかなったという体験（海外で勤務するために必要なビザが下りた、ビザの更新ができた、故郷においてきた娘が受験に合格したなど）からさらに祈りをする、またイスラエルの場合は聖地であることから他の国でのブロックロザリーとは違うという特別な意識を持っているということである<sup>9)</sup>。

## 2. 日本におけるブロックロザリー

先に述べたとおり、日本でもフィリピン人移民第一世代によって、東京都内にかぎらずフィリピン人が多く住む地域で、本国と同じようなブロックロザリーが行われている。日本の場合、本国と比べて絶対的にフィリピン人人口が少なく1居住区域（1ブロック）に居住する数がわずかなこと、フィリピン人は集住してフィリピン人街のようなものを形成せず散在していることから、本国のように1居住区域を周るような言葉通りのブロックロザリーは行われていない。また、個人的なつながりのあるグループ内で行われているものもあり、地理的なつながりではないことが本国との大きな違いである。先に書いたように、教会としての公式な活動ではないため、どこで誰が行っているか分からないものもある。さらに、本国では地域内を歩いて行われるブロックロザリーだが、筆者が参加してきたものはマリア像を抱いて電車等公共交通機関で移動することもあった。

## 3. 筆者の同行したブロックロザリー

### 3-1. 心理的な役割

1において聖地イスラエルでブロックロザリーを行うフィリピン人について紹介したが、なぜ、自宅で一人でロザリオの祈りをするのと別に、マリア像を持ち運び祈りを行う集団が各家を周るのか、その心理的な意義について筆者がブロックロザリーに同行した家庭の一つにインタビューしたところ、次のような話が聞かれた<sup>註4)</sup>。

自分の家にもともとマリア像はあるが、ブロックロザリーのマリア像は特別である。それは色々な人の家を周って自分の家にやって来る、特別なお客様のような存在である。だから自分の家に来ると嬉しい。わくわくする。Mama Mary が家にいる間、出かけるときに「行ってきます」、帰宅したら「ただいま」と声をかける。だからいなくなる時は寂しい。Mama Mary が自分の家に来てくれると、特別に bless (祝福) された気持ちになる。ブロックロザリーはみんなに自分の家で一緒にお祈りをしてもらえる。

教会が少なく、またミサの回数の少ない日本で、ミサに行けない人の祈りの時間になる。

このように、ブロックロザリーの Mama Mary は生きた存在のように特別であり、またブロックロザリーは宗教的環境の異なる日本で、家を訪れた人々と一緒に祈る時間を持つためのもの、あるいは一人で祈る時間を持つきっかけになっていることが分かる。

### 3-2. 同行したブロックロザリー概要

東京の北東部で埼玉県と接する足立区、東武線沿線にあるカトリック教会では、2013年2月からブロックロザリーが始められた。1987年に教会が創建されて以来、2000年代のフィリピン人信徒数のピーク時にはなかった活動が、2010年代になってからこの教会で行われるようになったということである。要因としては本国で行っていた活動と同様のブロックロザリーを継続実施する牽引力となる人物が現れたこと、ブロックロザリーという教会外での活動によって、教会に来ないフィリピン人とのつながりを作ることなど宗教性を越えたものへの意義を見出した人物が現れたこと、ブロックロザリーという文化のない日本の司祭の理解と協力が得られたことなどによると考えられる。このグループに教会が協力する部分もある、ある程度教会に認知された公的なグループとすると、ほかに主にこの教

会に集まるメンバーのなかの個人的なつながりでできた私的なグループとなるものもあったが、筆者は前者へ同行している。

活動開始当初はブロックロザリーの主だったメンバーのほか司祭の同行が頻繁にあり、訪れた家庭での祈りの内省や聖書解釈などが行われていたようである。しかし、時を経て筆者が参加観察するようになった2013年10月には司祭の参加も稀になっており、祈りが終わったあと食事と歓談のみで終わるようになっていた。司祭が参加するときにはたいていブロックロザリーと別のイベント（家の祝福、家族の追悼など司祭の同席が必要とされるイベント）が抱き合わせになることが多くなった。二つが抱き合わせで行われる理由は、ブロックロザリーも家の祝福もその後に食事を供するものであるため、別々にするより一度にすることでホスト側の食事の準備の負担を軽減する意味もあると考えられる。

家に集まるのは主だった固定ブロックロザリー主催メンバーのほか、訪れる家を紹介した人、そのブロックロザリーのホストの友人、友人の子ども（たいていは子ども同士も友人）、親戚（フィリピン人）などその時々によって異なる。他のイベント、特に誕生日会と抱き合わせのときには、祝われる本人（ホストとは必ずしも一致しない）の友人が多く集まる。フィリピン人のパーティーの場合、非常に多くの人が集まるので、たいていアパートの玄関は靴が並べきれず、靴の上に靴を重ねるか玄関の外にも並ぶことになる。

訪問される側は自分の家への訪問を、メンバーを知る第三者を通して間接的に依頼することもあり、初対面の場合もある。つまり、ブロックロザリーメンバーとホスト側が、ブロックロザリーを通して知り合うこともあるということである。このようなケースは普段教会に通っていないフィリピン人によくあり、フィリピンでは教会が至るところにあるため探す必要もなかったが、日本では教会を見つけるのは容易ではないため教会へ通っていないフィリピン人に、教会のプロッ

クロザリーメンバーがブロックロザリーで訪れることで、教会の場所とミサの時間を知らせる機会となっている。またフィリピン人だからといってブロックロザリーを必ずしも知っているとも限らず、あるいはロザリオの祈りを知っているとも限らず、ブロックロザリーメンバーが訪れることで初めて知ることになったフィリピン人女性も見られた。依頼者の家族に日本人がいる場合は、ブロックロザリーそのものについての知識がないため様々な反応が見られたがそれは後に譲る。

使用されている言語は英語である。訪問先がフィリピン人家庭であることを想定しつつも、タガログ語ではなくあえて英語にしているのは、日本人を含むフィリピン人以外の参加を期待していることが先述のブロックロザリーを行っているフィリピン人へのインタビューから明らかになっている。後に詳述するが、実際にホストのフィリピン人女性と同じ職場のペルー人家庭が、本国にはない行事であるにも関わらずブロックロザリーを行ったことがあり、主催者側の国や言語を超えた活動にしたいという狙いどおりになっている。

### 3-3. ブロックロザリーの様子

ブロックロザリーは、たいてい夕方から夜行われている。曜日は決まっておらず、互いの都合で調整する。週末やホストの誕生日パーティーなどと併せて行う場合は昼間に行くこともあったが、教会側メンバーもホストも通常平日昼間働いており、平日であれば仕事の後になり、ホスト側は帰宅してから食事の用意をする。あるいは仕事のない日に設定し、時間をかけて料理をしているホストもある。このように時間が遅くなるため、前の家と次の家の距離が遠い場合は同じ日にマリア像を届けに行くことはせず、教会側メンバーの家で一時的に預かり、別の日に次の家に届けに行くこともある。

マリア像移動当日は、教会のメンバー、時には前の家のブロックロザリーのホスト（フィリピン人女性がほとんど）も一緒にマリア像を次の家まで運ぶ。運び

方は最寄り駅からの距離によって、徒歩、自転車によることもある。バス、タクシーに乗るなどして行くこともある。ほとんど天候に左右されることなく雪が降った日も台風が来ると言われた日も行われている。これはブロックロザリーのホストが仕事をしていることが多く、その仕事の都合の関係で決めた日にちを変更することが容易ではないことと、教会側メンバーは“devotion（献身）”の下に活動しているため自己犠牲を厭わないことに因っているようである。ブロックロザリーメンバー側は、日程によって全員参加できることもあるし、一部だけが参加することもある。あくまでもホスト側の都合に合わせて、当日参加できるメンバーが参加している。また、予定していた日程までにホスト側との確認が取れず当日キャンセルになったり、ホスト側から日程変更を申し入れられたりすることもあった。

ブロックロザリーのホストが日曜日に教会に来て顔なじみであっても、実際の居住地を知っていることは少なく、住所を頼りにあるいは当日ホストと電話でやりとりしながらホストの家を探し当てることもあるし、ホストが駅や近隣の目印になるところまで迎えに来ることもある。

このようにして次のホストの家の玄関先にマリア像を持ったメンバーが到着すると、マリア像を先頭に人々が家に入って行く。

ホスト側の家にもともと祭壇があれば、そこにもともと置かれている他の聖像と一緒に置き、もし祭壇がなければブロックロザリーのマリア像のために用意された祭壇に置く。場所はたいていダイニングあるいはリビングにある。つまり多くの場合、家族の集まる部屋にあるということである。



写真1:ろうそく、ブロックロザリーのマリア像と、幼いイエスの像（フィリピンでは特にサントニーニョ<sup>註5)</sup>と呼ばれ大事にされている）、十字架にかけられたイエス、花。マリア像とろうそく、ファイル以外はホストの家にもともとあったもの。

マリア像が手に持っているものがロザリオと呼ばれるもので、これを繰り返しながら祈りを唱える。祭壇前に置いてあるのはブロックロザリーの説明が書いてあるこのグループが作成したA4サイズのファイルである。（2016年6月葛飾区筆者撮影）

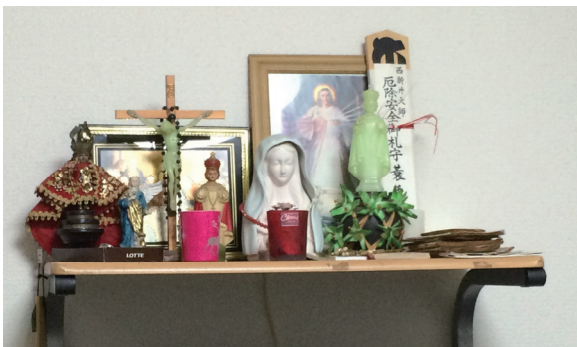


写真2:もともと家にある祭壇（ブロックロザリーのマリア像のない状態）。ろうそくとマリア像、イエス像、サントニーニョ像3体（薄緑色のもの右側と赤と金の華やかな衣装を着ている黒い幼いイエス左側と中央）、十字架につけられているイエス像、イエスの絵などがあるのは普通だが、神社の御札があるのが日本で時々見られる光景。（2016年6月足立区筆者撮影）



写真3:左手前のマリア像がブロックロザリーのマリア像。そのほかには、ホストが本来持つ祭壇。所狭しとイエスやマリア等の像や絵等が並べられている。（2017年1月荒川区筆者撮影）

祭壇にマリア像を設置すると、教会側メンバーの一人による始まりの祈りが唱えられ、それに続いてホストによる歓迎の祈り行われる。祈りが終わった後初めて“Good evening”、「こんばんは」と英語と日本語で挨拶が行われる。その前にもいくらかの会話がなされているが、挨拶は常にこのタイミングで行われる。その後、もしホストがマリア像滞在期間にすべきことを知らなければ、写真1に写っている教会のメンバーが作成したファイルに祈りと曜日ごとの祈りが掲載されているのでそれを説明し、次にマリア像を迎えに来る日程を決め、特に他のイベントがない、あるいはホストと親しくなければそのまま帰る。マリア像滞在期間は教会側メンバーとホスト側の都合と、場合によっては次の家の都合で決めるため毎回期間は異なる。但し、その期間はたいてい一週間以上、一ヶ月ほどまでの間になっている。他のイベントと併せて行う場合には、マリア像を設置し迎え入れの祈りをした後、訪問

した曜日のロザリオの祈りを唱える、また親しい場合はおしゃべりをするなどして帰る。

約束の期間を経てメンバーは再びこの家を訪れる。教会メンバーとホスト、さらに時にはホストが招いた人々と一緒にファイルに用意した一式の祈り、導入にあたる祈りからその曜日のロザリオの祈り等を唱え、マリアを称える歌を歌い、最後にホストによる別れの祈りを唱えるが、この別れの祈りのときにホストが感極まって涙を流すこともあった。そして祈りが終わって“Good evening”、「こんばんは」という挨拶がなされるのは最初の日と同じである。

その後ホストが用意した料理が振る舞われ、ひとしきり歓談した後、人々が先に、マリア像が最後に家を出る。

この食事のあとの歓談だが、後に変更されている。2016年に入ってからメンバー内で問題として挙げられたのが、訪問時（マリア像を迎えに行く日）の内容の変化である。筆者が観察を始める前は、即ち司祭が同行していた頃は、マリア像滞在期間をどのように過ごしたか、また聖書解釈などが行われていたそうだが、筆者が観察を始めたころは仕事が終わって夕食時に行くこともあって、祈りが終わるとすぐ食事になり、そのような宗教的な共有の時間がとられず、活動そのものが宗教性を深められていないということが問題として挙げられるようになったのである。この問題は、ブロックロザリーが一連のプロセスをこなすのみになるという形骸化の恐れがあり、それはたとえ今後家族にオープンになっても、その家族での継承の意義も失われ形骸化することを危惧したものである。家の祝福という他のイベントとの抱き合わせも同様の問題をはらんでおり、同様にこの二つを一緒にしてスケジュールを組むことを避けるようになった。そのため、2016年の下半期に入り、食事のあとにその日の福音朗読箇所をタガログ語で読み（筆者が同行する場合は英語も読む）、その後聖書に書かれていることに関することを思い思いに話して共有する時間が持たれるようになった。

た。但し、この共有の時間はタガログ語で行われ、タガログ語以外を話すのであれば英語となっている。

#### 4. 調査概略および評価基準

同行期間：2013年10月28日～2017年10月3日

範囲：最北端はせんげん台駅（埼玉県越谷市）、最南端は亀戸駅（東京都江東区）と県境を越えて幅広く移動している。東武スカイツリー線および東京メトロ日比谷線、また京成線で移動できる範囲である。地図を見ると分かるが、特に南北に長い。（下地図は最寄り駅に☆を施した。）



訪問した世帯数は延べ 68 世帯である。訪問はマリア像を持って行く時と持って帰る時の2度行われるが、筆者がどちらか1回にしか参加できなかったこともあるので、必ずしも同じ世帯に2度行っているわけでは

ない。またこの延べ数には、ブロックロザリー2回目の世帯も含んでいる。うち2世帯のみ同じ家庭でペルー人であるが、それ以外は単身あるいは日本人配偶者を持つフィリピン人女性と、わずかながらいる夫婦ともフィリピン人の世帯である。ペルー人家庭は現在のところ例外的なケースである。

本稿で注目するのは次の6項目とした。

- ① 親またはその他の大人の子どもへの参加の促しの有無
- ② ブロックロザリーメンバーと子どもの親密度
- ③ 子どもの祈りへの参加の有無
- ④ ホストの配偶者の参加の有無
- ⑤ 他の家族員を巻き込むイベントを伴う場合
- ⑥ 使用言語

①は直接的な要因となり得、②は①にある親以外の大人が直接子どもに話しかけ参加を促すことができる関係にあるかを明らかにするため、④は宗教が異なっても配偶者の積極的な理解や参加が子どもの参加に影響するかを明らかにするためである。本稿の「はじめに」に書いたように、言語面においてダブルの子どもは言語的にマイノリティである移民の親の方の言語を継承しないことがあるが、これに関して、ドイツで行われた調査<sup>10)</sup>によって、ドイツで国際結婚した日本人が子どもを補習校に通わせ日本語を学習させることに、配偶者やパートナーの協力を得ることが不可欠な要素であることが明らかになっている。この言語の継承の例から、日本におけるフィリピン人女性の宗教の継承は日本人配偶者の協力なしには難しいと考えられ、それを検証すべきだと考えるからである。

## 5. 詳述と考察

子どもの祈りへの参加の有無を家庭での宗教継承の一つの側面として評価とするため、「子どもの祈りへの参加の有無」を軸にその他の項目を詳察する。

68世帯のうち、子ども世代である第二世代、第三世代が同居している世帯が54世帯であった。子どもは乳

幼児から成人を迎え現在社会人となった年齢まで様々である。複数子どもがいる場合は、子どものうち一人でも参加した場合に参加とカウントしたが、第二、あるいは第三世代のブロックロザリーの同席は23世帯で半数以下だった。この数字は親と離れることのできない乳幼児も含んでいる。本国では家族全員で参加すると言われているブロックロザリーだが、日本において大きく状況が異なることが分かる。不在が5世帯で、在宅していても参加しなかったのが24世帯となる。不在については、第一世代である母親が自分の友人たちが来る自分の時間と称して子どもに外出を勧めていたケース、第二世代が仕事から帰宅していないケース、また未就学児であるため祈りに支障があると近所に預けられていたケースもあった。要するに多くの場合、ホストの家族の都合でブロックロザリーの予定が組まれているのではなく、ホストであるフィリピン人女性本人の都合で組まれていることが分かる。そこには、家族のブロックロザリーに対する無関心や拒否のほか、第一世代のブロックロザリーに子どもを参加させないようにする姿勢や、第一世代のみの活動と第一世代の間では捉えられているように見受けられるケースもあるということである。

在宅していても参加しなかった子どものケースとしては、未就学児だからということで別室にいたり、未就学児の面倒をみるためにその姉も参加しなかったりということもあったが、それ以外は在宅して自分の部屋にいたというものである。先にも述べたが、マリア像が置かれブロックロザリーが行われる部屋が、多くの場合ダイニングキッチンやリビングといった家族が集まってくつろぐ場所であるにも関わらず、子どもたちは自室にこもって関わりを持たなかった。さらには子どもの部屋に祭壇が置かれているところもあったが、子どもの部屋で祈りが行われている間、子どもを隣室に行かせる家庭もあった。祈りが終わって記念写真を撮る段になって、写真を撮る役として子どもが呼ばれて出て来ることもあったが、祈りの間は同席し

なかった。

一方、夫婦共フィリピン人で二人とも在宅している家庭では、乳児、就学児を含む家族全員が参加している。この様子がおそらくフィリピン本国での姿なのであろうと考えられる。

### 5-1. 親またはその他の大人の子どもへの参加の促し

先述の子どもが不在だったケースにあったように、祈りの時間が第一世代のもののように暗黙のうちに考えられているような状況もあり、筆者の同行当初は促しがなされていなかった。ホストである第一世代と第二、第三世代のつながりが強ければ強いほど、子どもあるいは孫の参加が自然に行われた。ある程度年齢が高くなり、第一世代から離れて自分の世界を持つようになる、自発的な参加は見られなくなる。子どもが参加しようがしまいが、第一世代の間では当然のことのように受け止められていたように見受けられたが、ブロックロザリーメンバーの中には、次世代の子どもの参加を望む声もあった。

そのような自然にあるいは自発的に参加をしない子どもへの参加の促しは、フィリピン国内と異なりブロックロザリーメンバーが意欲的に行わなければならないが、それが行われるようになったのは、筆者が同行するようになって3世帯目だった。以降、子どものいる家庭でブロックロザリー到着時に顔を見せている子どもに対してブロックロザリーメンバーが子どもに参加を促し、それを見て親が同様に参加を促すことが多くなった。先に述べた第二、第三世代の同席の23という数字はこの3世帯目以降の第一世代の促しによる参加の数字を含んでいる。子どもは、声をかければほとんどの場合参加している。但しある程度強く働きかなければならないところを、多少弱めた場合は子どもは参加しなかった。同室にいながら他のことをしているケースもあった。当然のことながら、親が子どもを別室に行かせれば子どもはそれに抗って参加するこ

とはない。

### 5-2. 訪問者とホストの関係

5-1で述べたように、ブロックロザリーメンバーによる促しが行われるようにはなったが、それが常に行われるわけではなかった。それはブロックロザリーメンバーとホストの関係にもあったようである。

ブロックロザリー依頼者には、ブロックロザリーメンバーと面識のない人もいる。面識があってもそれほど親しくない人もいる。ブロックロザリー紹介者と依頼者は親しい場合もある。ブロックロザリーメンバーあるいは紹介者が依頼者と親しく、またその子どもとも親しいこともある。そのようななかで、ブロックロザリーメンバーがホストと親しい場合、またホストの紹介者が同行した場合は、ホストに対し子どもも参加させないかという促しが起こった。もしブロックロザリーメンバーが子どもとも親しければ、子どもへの直接の促しも行われた。

しかし反対に言うと、ブロックロザリーメンバーがホストやその子どもと面識がない場合には促しが行われなかったということでもある。

### 5-3. ホストの配偶者

ここで言うホストの配偶者とは主に依頼者の夫になる。先に述べたように日本在住のフィリピン人の男女比は女性が圧倒的に男性より多いこともあり、教会の内外的なブロックロザリーの依頼は女性からがほとんどだからである。そして配偶者は、先に述べたようにフィリピン人女性は日本人男性と結婚している割合が高いので、多くの場合日本人男性を指す。

筆者が同行を始めてから最初の配偶者の参加は21、22世帯目で、これはフィリピン人家族の時である。それまで日本人配偶者が在宅していても参加がなかったのである。日本におけるフィリピン人家族は極めて少ないので日本では例外的であろう。それまでは、日本人配偶者がブロックロザリーメンバーが到着時に在宅



していたとしても、挨拶をして子ども同様別室に入ったり、同じ部屋にいてもテレビを見ていたり（音を消すように頼んだこともあった）、あるいは家が狭いからと出て行ったりして参加することはなかった。そしてこのフィリピン人家族訪問の後、日本人の夫で初めて祈りに参加したのは58世帯目だった。ホスト自身がブロックロザリーメンバーと比較的深く交わっておりこの男性もブロックロザリーメンバーとも面識があり、この家庭への筆者の訪問も3回目で、筆者自身もこの日本人男性とは別の家庭でも会ったこともあり面識がないわけではなかった。夫は敬虔ではないが所謂一般家庭に多い仏教徒で妻とは宗教が異なるが、妻やその日の参加者の強い勧誘で祈りに参加することになったのである。但し、この家庭には子どもはいない。

筆者が同行してきたなかで、子どもがいてブロックロザリーの祈り自体に日本人配偶者が同席したケースは68世帯目だけだった。但しこのケースは、子どもの参加はなく、配偶者も58世帯目のような祈りを唱えることまではしていない。しかし一緒に十字を切る行為は見られたが、ブロックロザリーのホストによれば、言語が英語だったため祈りには参加しなかったのだと言う。（このときは、配偶者はロザリオの祈りの始めに不在で、日本語使用を想定せず英語で始めていた。）このように、完全に妻の宗教活動を否定しているわけではない姿勢が見られる家庭もあることはある。子どもが祈りに参加したケースのうちの1件で、自分はキリスト教ではあるがカトリックではないからマリア信仰はなく、祈りには参加しないというケースがあった。このことから子どもにはカトリックの洗礼を受けさせることを了解している家庭が多いにも関わらず、日本人夫の無関心とは別に、異宗教、異宗派への抵抗の可能性も見え、家庭内の異なる宗教環境に生きる子どもの複雑な背景を垣間見ることができる。

#### 5-4. 家族を巻き込むイベント

既に述べたように現在は分けて行われるようにな

ったが、かつてホスト側との日程調整や食事準備の負担を軽減するため、ブロックロザリーを他のイベントと併せて行うことがあった。それは、家の祝福（新居での安全な生活を祈るもの）、誕生日、家族の追悼である。司祭が同行し、それぞれ多くの場合ホスト側の友人、知人、親戚が集まるためブロックロザリーの時より多くの人間が集まり大掛かりになる。

家の祝福は9件あったが、フィリピン人家庭を含む子どものいる家庭は7世帯だった。家の祝福は家族全員とともに一部屋一部屋を周りながら行われるため、配偶者である日本人夫も子どもも参加した。しかし、予め具体的に何をするかを妻である依頼者から知らされておらず、当惑している様子が観察された。ホストであるフィリピン人女性の友人が多く集まった場合、フィリピン式に家の階段から小銭を落とし、集まった子どもたちがそれを拾い集めるという行事が行われたこともあった。但し一軒家の場合のみで、アパートやマンションで階段のない家庭ではこの習慣が行われたのを観察したことはない。

家の祝福には参加した日本人配偶者も、その前後のブロックロザリーには参加せず、別室あるいは同室にいて他のことをしていた。

誕生日パーティーと併せて行われたのは4件だった。うち2件はホストの誕生日ではなくその家族の誕生日で、日本人夫は不在だった。のこり2件はホスト本人の誕生日パーティーで、ホスト本人がブロックロザリーメンバーと親しかった。誕生日パーティーに宗教性は全く見られなかった。厳密に言えば、パーティーに供された食べ物を食べる前に祈る程度（通常食事の前には祈るものなので、特別ではない）であった。家族の誕生日と併せたものでは、集まったフィリピン人友人たちの中にも宗教的な意図を持って集まったわけではないからか、ロザリオの祈りに参加しない人があり、フィリピン人の間にもブロックロザリーに対する姿勢の異なりが見られた。第一世代である若年層にこの不参加が多く見られたので、これはフィリピン国内での

世代間ギャップか或いは年齢の問題が考えられる。これについて、3-1 のインタビュー回答者の話では、最近自分の出身地でブロックロザリーを行っているのは年長者や仕事のない主婦のみで、若い人がやっていないようであるということなので、本国の状況を反映しているのかもしれない。しかし、地域的に異なる可能性もあるので、検証が必要である。

家族の追悼は4件だった。うち3件は司祭を伴わないもので、日本人夫は不在あるいは参加はせず観察していた。司祭が同行したときは日本人夫も参加したが、何をするのか知らされていなかったことが本人の言により後で明らかになっている。

### 5-5. 使用言語

3-3において述べたように、使用されている言語は日本人参加の可能性も視野に入れ、タガログ語ではなく世界的な共通言語である英語であり、祈り全体を掲載するファイルも英語と、一部ラテン語の歌の歌詞となっている。しかし、フィリピン人第一世代にとって英語は第二言語であっても、多くの第二世代にとって英語は外国語で運用できない現状にあり、子どもの参加と言ってもその場にいるだけで、ファイルがあっても英語で祈りを唱えることはできないのが実情であった。この言語の壁はフィリピン人女性と結婚した多くの日本人夫も同様である。筆者の観察においては、英語で祈りを唱えられた子どもは2件（フィリピン人家族1世帯）だけである。その祈りもファイルを見るのではなく、すでに家庭で教えられ記憶されている祈り二つ（日本語で「主の祈り」と言うキリストが教えたとされるものと「アヴェ・マリアの祈り」というマリアへの祈りで、前者は宗派、言語ごとに異なりはあるが全世界のキリスト教に共通し、後者は言語は異なっても全世界のカトリックのみで唱えられる、両方とも非常にメジャーな祈り）であった。しかしペルー人家庭を訪問した際、ペルー人にとって英語は母国語ではないため上記祈り二つはスペイン語を用い、ブロック

ロザリーメンバーは英語を使用するという二重言語構造が起きた。

さらに大きな転機が訪れたのは40、41世帯目となる2015年5月である。ブロックロザリーのホストが、英語のできない自分の子どもも祈りに参加させたいので日本語版のロザリオの祈りを用意して欲しいという要望をしたことで、日本語のロザリオの祈りが通常使用しているファイルに加えられることになったのである。但し、日本にはロザリオの祈りは存在しているがブロックロザリーという活動は存在しないため、ブロックロザリーで唱えられている一連のマリア像の入れから別れに至る祈りはない。

日本語版が必要とされた背景を詳細に述べると次のようになる。つまり、子どもはフィリピン人母親と一緒に教会に通うが、母親と一緒になので日本語ではなく母親が得意とする英語ミサに参加する。そこで毎回唱えられる”Lord’s Prayer”（先に説明した日本語でいう「主の祈り」）はミサの一連の祈りに埋もれ、意識しなければ他の祈りと違うことは認識されず、英語であることに加え、親が取り立てて教えない限り唱えられるようにならない。あるいはロザリオの祈りのなかで50回以上唱えられる「アヴェ・マリアの祈り」はミサの中では唱えられないため、親から教えられなければ知りようもない。さらに親が日本語の「主の祈り」や「アヴェ・マリアの祈り」を知らないため子どもに教えることはなく、教会学校に通わなければ日本語ですら唱えられるようになっていないのである。

しかし、この日本語のロザリオの祈りを加え漢字にルビを振ったことで、祈りを知らない、英語の分からない、また漢字が読めない世代への促しが容易となり、子どもたちが同席するだけでなく、実際に言語は異なっても第一世代と一緒にロザリオの祈りを唱えるという積極的な参加が可能となった。ちなみに、この2015年5月は家の祝福も併せて行われたため参加者が多かったが、参加した別の家の子どもたちも日本語で祈りを唱えている。さらに日本人夫の参加の促しも容易に

なったことは明らかで、それで 5-3 にあった日本人夫の参加が実現したのである。そのことは 68 世帯目の配偶者が祈りが英語だったため参加しなかった様子からも逆に証明することができる。

#### 5-6. まとめ

以上 5 つの点から見てきたが、宗教の継承の可能性から考えると、日本の国際家庭では言語問題の解決がまず大きな一歩となったと言えるであろう。裏を返せば、現状として言語の継承が行われていないため、第二世代の言語に置き換えれば宗教の継承の可能性、さらに日本人配偶者の参加の可能性はあるということである。それと同時に参加の促し、働きかけを行う必要がある。

他のイベントとの抱き合わせは、集まった人々の意図が異なるため、その場にいる人数は多くなっても参加者が増えることにはつながらない。またこの場面でも、第二世代や日本人配偶者には、日本語での説明が必要なことが分かる。

#### 6. ブロックロザリーの今後の課題と展望

ブロックロザリーは、フィリピン人の間ではその性質上「ブロックロザリーだから」という理由で、見ず知らずの関係でも家庭に入りこむことが許容されるオープンなものという文化的共通理解がある。そのためブロックロザリーを理由に、教会外で形成されている教会に来ない（来られない）フィリピン人グループのつながりと、教会側メンバーとの新たなつながりを作る可能性を秘めている。近所のフィリピン人が、ブロックロザリーメンバーの知らない別のフィリピン人を紹介し、アパートの 1 階から 2 階へ、隣室へ、町内の別の家庭へと移動する、文字通りブロックロザリーだったこともあった。この点においては、ブロックロザリーを主催している側の目的を達成することができていると考えられる。

しかし、今まで見てきたように初対面の家庭では子

どもへの参加の促しが行われておらず、第一世代内だけのもので終わってしまっている。また、家庭内ではブロックロザリーはオープンではなく、配偶者の協力はおろか第一世代が自分のプライベートな時間にして家族と共有していない、あるいは家族が知らされていないケースが多い。また、3-1 のインタビューでは、マリア像滞在期間にホスト一人だけで祈っていたことも明らかになっている。ブロックロザリーにかぎらず家庭での祈りや宗教そのものが母親のものとして秘匿されたまま、カトリック信者の洗礼を受けている子どもに継承されずにいるケースが多い。それは、祈りの後の子ども（あるいは配偶者）の食事の参加状況にも現れているが、それは別稿に譲りたい。

ブロックロザリーのオープンさは、文化や宗教の異なる異国の地における、家庭での意図的な第一世代からの文化、宗教を継承する機会になり得る。第一世代であるフィリピン人女性が、言語の問題を超えて積極的に日本人夫や第二世代以降にオープンにし、働きかけをすることが今後の課題と言えよう。また 1 件の成人を除き、高校生以上の参加は今のところない。自立した年齢層を新たに巻き込めるかどうかも課題である。

#### 7. 最後に

ブロックロザリーは小さな活動である。小教区（教会）によっては、その活動の存在自体が小教区に知られていないこともある。また、本来はフィリピン本国で行われている活動が、宗教的環境の全く異なる日本でそのままの形を維持することすら難しい状態であるため、ブロックロザリーが「はじめに」に述べたような子どものアイデンティティ形成、親からの文化的宗教的習慣の継承、さらに宗教そのものの理解や継承の問題を全て解決するとは考えられない。

しかし、そのファーストステップとして家庭で継続的にできる活動であり、教会に行かなくともできるフィリピン的宗教の継承の機会として活かされるものであると考える。これらの問題は自然に解決されるもの

ではなく、母国とは違う国にいるブロックロザリー依頼者側の意識を変えることがまず必要で、ブロックロザリーメンバーにその働きかけが期待される。

2013年から約5年に亘る観察でもブロックロザリーの活動の変化が見られた。日本語の採用によって配偶者や第二世代以降の積極的な参加が容易にはなかったが、それが恒常化するのか現在のところ分からない。なぜなら、食事のあとの聖書箇所共有は始まったが、この聖書箇所共有は日本語では行われていないからである。そのため、配偶者や第二世代以降が、たとえ祈りまでは参加してもその後の聖書箇所共有への参加は望めないと思われる。ブロックロザリーメンバーとしてフィリピン人第一世代以外の人々の参加をどこまで望むのか、また彼らが第二世代のアイデンティティをどのように考えるか、今後メンバーのなかの問題意識によってさらに変わっていくかもしれない。本国での状況も併せ、今後この日本国内のブロックロザリーがどのように変化するか追跡調査を行ってきたい。

最後に、筆者の同行を快く迎え入れてくれたメンバーとホストの家庭、インタビューに答えてくださった方々に謝辞を申し上げたい。

[註]

註1) 平成22年国勢調査によれば、妻の国籍がフィリピン人の総数77,725人のうち、夫の国籍が日本人は69,059人となっている。

註2) 具体的な祈りについて [National Shrine of Mary Help of Christians]<sup>11)</sup>を参照されたい。

註3) 筆者およびもう1名で2014年に行ったインタビューによる。

註4) 2017年10月8日に筆者が行ったインタビューによる。

註5) マゼランがセブ島に上陸した際、王に授けられたとされている。

参考文献

1) 藤本陽子；家庭内での使用言語と子どもの日本語会話能力－フィリピンにつながる子どもたち－，至誠館大学研究紀要，1：29-39，2015

2) IndexMundi.com；Philippines Demographics Profile 2014, [http://www.indexmundi.com/philippines/demographics\\_profile.html](http://www.indexmundi.com/philippines/demographics_profile.html) (2016年6月17日アクセス)

3) 法務省；在留外国人統計月次2015年12月，総務省統計，

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001150236> (2016年8月12日アクセス)

4) 政府統計の総合窓口；平成25年人口動態調査中巻8，総務省統計局，

[http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL71050103.do;jsessionid=FYqVJsyQXZMJdQBLkyhbfqtfid1Bt6byGmY0rtCfTKCnwQcpGq1b7!2015876451599191414?\\_toGL71050103\\_&listID=000001127023&forwardFrom=GL71050101](http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL71050103.do;jsessionid=FYqVJsyQXZMJdQBLkyhbfqtfid1Bt6byGmY0rtCfTKCnwQcpGq1b7!2015876451599191414?_toGL71050103_&listID=000001127023&forwardFrom=GL71050101)

(2016年8月12日アクセス)

5) LeMay, Alec；Inculturing Inculturation: Considering Multiculturalism within the Roman Catholic Church of Japan amongst Japanese, Filipinos, and Filipino-Japanese. Monograph Series：12, Institute of Asian Cultures Sophia University, 2013, 39

6) Weddell, Sherry A；Forming Intentional Disciples. Huntington, Our Sunday Visitor, 2012, 41-42

7) WikiPilipinas editors；Block Rosary, [http://en.wikipilipinas.org/index.php/Block\\_Rosary](http://en.wikipilipinas.org/index.php/Block_Rosary) (2016年8月12日アクセス)

8) Mitchell, Thomas A；Social Service in the Parish, Philippine Studies, 4(4), 2008, 570-572

9) Liebelt, Claudia；The “Mama Mary” of the White City’s Underside Reflections on a Filipino Domestic Workers’ Block Rosary in Tel Aviv, Israel, Migrant Domestic Workers in the Middle East, Palgrave Macmillan, 2014, 95-115

10) つなぐ－わたし・家族・日本語－, 日本語文化言語

センター, 2014, 95

11) National Shrine of Mary Help of Christians ; The Block

Rosary (Mary's Home Visitation),

<http://www.geocities.ws/nsmhc/blockrosary.html>

(2016年8月12日アクセス)

**Passing Down the Mother's Religious Culture to the Next Generation at Home  
in a Cultural Different Country  
–The Possibilities Found in Filipino Block Rosary –**

Yoko FUJIMOTO

Abstract: We find that some Filipinos living in Japan participate in a ceremony called Block Rosary. This ceremony is practiced among Roman Catholics in the Philippines. There, typically, it is a family event.

Japan's culture and religious practices differ greatly from those of the Philippines. Regardless of this environment, many Filipino women have married Japanese men. Since October 2013, I have been studying the Block Rosary ceremony as it is practiced in Japan. I have visited a total of sixty-eight families in order to see whether or not there is a possibility that those women could teach their children how to perform the ceremony at home. Often I found that these women neither invited their husbands nor even their children who had been baptized as Roman Catholics to the ceremonies. The children only attended this event if someone invited them. Also, it is very important that the ceremony be translated into Japanese so that the children, who usually do not speak English, can understand the procedures and join in the ceremony in a positive manner.